

エンパシーと阻止効果

——「自分」の束縛と「視点投射」——

西垣内 泰 介

神戸松蔭女子学院大学

【要旨】 中国語などで観察され、重要な問題領域を作っている阻止効果について考察する。視点投射とそれにもとづく「自分」束縛のメカニズムを提示し、日本語で阻止効果が顕著に見られるのは「自分」の先行詞が「視点焦点」である時で、「意識焦点」が関わるケースで起こる「有意識条件」の効果と相補分布をなすことを示す。

本論の分析では、日本語に見られる阻止効果はエンパシーの制約の違反であり、これに関わるさまざまな言語現象について Kuno and Kaburaki (1977), 久野 (1978) などで「視点の一貫性」という概念のもとで分析された現象を、「基準クラス」の視点投射の「指標の一貫性」によって説明する分析を提示する*。

キーワード: 再帰表現, 束縛, 視点投射, 阻止効果, エンパシー

1. 阻止効果

「阻止効果」(the blocking effect) は、中国語などの言語で観察され分析されている再帰形に関わる重要な現象である。中国語では人称の異なる名詞句が介在すると再帰形 *ziji* の長距離束縛が阻止され、局所的束縛のみが許されるという現象が存在

* 本論文は Nishigauchi (2014) から派生、発展したものである。内容としては、同論文で展開している「自分」束縛の理論的枠組みを使い、同論文の 7.2 節で扱ったデータを分析するものである。前提とする理論的枠組みは同論文で提示し展開しているものを本論文の 2.2 節で要約するかたちで提示している。

しかし、本論文の 2.2 節で提示している理論的枠組みでは「一致」の概念を用いており、Nishigauchi (2014) の 2.1 節で展開しているものと異なったものになっている。本論文の 3 節以降は Nishigauchi (2014) の掲載が決定して以降あらたに考察しなおした結果であり、分析方法が異なっている。

Nishigauchi (2014) の 7.2 節は基本的に久野 (1978) の分析方法を視点投射を含む統語論的枠組みに反映させるにとどまるものであったが、本論では多層構造をなす視点投射に「一致」を介して付与される指標の一貫性に基づく分析を展開している。

本論文第 4 節の 1 人称をダイクシス投射に反映させる分析、第 5 節のロゴフォリック階層における含意関係を多層構造の視点投射に反映させるための「拡大一致」のメカニズムは Nishigauchi (2014) には存在しない。また、これらを用いた 6, 7 節の分析はまったく新しいものである。

本研究がこの論文のかたちになるまで、多くの友人、同僚の意見やコメントに恩恵を受けている。阿部雄一郎、新井文人、Peter Cole、日高俊夫、Norbert Hornstein、Jim Huang、Howard Lasnik、Peter Sells、澁谷みどり、富岡諭各氏および『言語研究』の 2 名の査読者に感謝申し上げたい。『言語研究』の編集委員は、本論文の投稿当初から、特に最終原稿の作成にあたって多くの時間とエネルギーを使って導いてくださった。本研究は日本学術振興会科学研究費助成事業課題番号 21320084 および 26370468 の助成を受けている。

する。これを「阻止効果」とよんでいる。中国語の阻止効果については多数の論文が発表されている。Huang and Liu (2001), Pan (2001) など参照。次の例文 (Pan 2001: 280, 例 (1c)) は中国語の「阻止効果」を示す典型的な例で、補文の主語が1人称ないし2人称であることで、*ziji* の主文主語による束縛が阻止されている¹。

- (1) *Zhangsan_i juede {wo/ni}_j dui ziji_{zj} mei xinxin.*
 Zhangsan think I/you to self not confidence
 'Zhangsan thinks I/you have no confidence in myself/yourself/*him.'

この文をそのまま日本語に訳してみても、「自分」の主節の主語による束縛が特に妨げられるということはない。

- (2) タカシ_iは{僕/君}が自分_iを信用していないと思っている。

このようなことが、日本語の「自分」に関連して阻止効果についての考察があまり行われていないことの原因のひとつと考えられる。

しかし、次の例文を考えてみよう。

- (3) a. 先生が自分_iをよびにきた時, タカシ_iはぐっすり眠っていた。
 b. *僕が自分_iをよびにきた時, タカシ_iはぐっすり眠っていた。

この例のペアでは、(3a) で「時」の副詞節の主語が「先生」であるのを (3b) で1人称「僕」にかえると容認性が著しく落ちる。

また次の例文は久野 (1978: 第2章) で分析されているタイプのものだが、関係節内の主語を1人称にかえることで容認性の劣化がみられる²。

- (4) a. 太郎_iは花子が自分_iに貸してくれたお金をなくしたらしい。
 b. *太郎_iは僕が自分_iに貸してくれたお金をなくしたらしい。

久野 (1978) は「阻止効果」ということばを使っていないが、同書は日本語における阻止効果についてのきわめて重要な研究である。

本論文は、まず (3ab) の対比についての観察と分析からはじめる。第2節の議論でキーになるのは「視点」(Point of View, POV) にかかわる助動詞、またそれに関係する「有意識条件」(Awareness Condition) の考察である。これを説明するための枠組みとして、「視点投射」との「一致」を基盤とする「自分」束縛のメカニズムを第2.2節で提示し、第2.3節でこの分析の枠組みによって第2.1節で見た問題の分析を示す。第3節以降は久野 (1978) で分析されたエンパシーに関わる問題

¹ 例文のクロス、訳文はPan(2001)に従っている。同論文から引用する例文は、以下同様である。

² 『言語研究』の査読者のひとりには、(4ab) で「自分」を発音せず、*pro*としても同じ対比があることを指摘している。同じことが (3ab) にも当てはまるように思われる。これは、「自分」束縛のメカニズムにコントロールが関わっているという本論の主張を支持するポイントとなると思われる。この点については2.3節で議論する。

について、本論の立場から「自分」との「一致」によって視点投射に付与される指標の一貫性にもとづく分析を提示する。

2. 有意識条件と阻止効果

2.1. 有意識条件

前節で見た、(3ab) の対比を説明する上で、「有意識条件」(Awareness Condition) を考えることが不可欠である。「自分」に関する意味的な研究の中で「再帰形の先行詞の指示対象である人は『自分』を含む節の内容を意識していなければならない」という趣旨の制約が提案されている(久野 1973: 194)。これを「有意識条件」とよぶ。例えば次の文の間に見られる非対称性である。

- (5) a. 先生が自分_iをほめた時, タカシ_iはひどく驚いた。
 b. *先生が自分_iをほめた時, タカシ_iはぐっすり眠っていた。
 c. 先生が自分_iをよびにきた時, タカシ_iはぐっすり眠っていた。

(5a) では、「タカシ」が「先生が僕をほめた」という意識があって驚いているので、ここでの「自分」の束縛は有意識条件に従っている。それに対し、(5b) では、「タカシ」は眠っているのでそのような意識がないことがここでの「自分」束縛を容認性の低いものにしてている。

しかし、主文の内容が同じで「タカシ」が眠っている(5c) では「タカシ」を「自分」の先行詞として解釈することが可能である。つまり、この文は有意識条件に従わないということである。(5c) の容認性を考えるためには、本論の基盤をなす「視点投射」、そしてそれを前提にした本論が仮定する「自分」束縛の枠組みについて言及する必要がある。

2.2. 「自分」束縛の枠組み

世界の多くの言語で「証拠性」(evidentiality)「評価」(evaluation)「伝聞」(hearsay)などの意味のないし語用論的な意味概念を担うモーダル(modal)助動詞が用いられることを Speas (2004) が指摘している。Speas (2004) はこれらのモーダル要素はそれぞれ個別の投射を形成し、言語によってはこれらの(総称的な呼び名としての)視点投射(POV projection)が多層構造をなすと考える。

日本語はこのような視点投射を積極的に用いる言語の1つであり、少なくとも次の視点投射が再帰形束縛などの現象に関与している³。

- (6) 1. 証拠性(evidentiality): 「そう, がる, Ø」
 2. 認識, 直接的経験(epistemology): 「寒い, V たい」

³ Speas (2004) の枠組みではこれらのさらに上位に「発話行為」(Speech Act, SpAP)の投射が存在する。本論文では直接関与することはないが、5節で Sells (1987) の「ロゴフォリック階層」について検討するところで「発話行為」の投射について言及する。

3. 評価 (evaluation) : 「(て) しまう」
4. 受益 (benefactive) : 「やる, くれ」
5. ダイクシス (deixis) : 「行く, くる, 1, 2 人称代名詞など」

これらの投射は構造上の階層をなしており, これらの中では証拠性をもっとも上位(語順としては最後), ダイクシスがもっとも下位でルートの動詞にもっとも近い位置に現れる⁴。視点投射は Cinque (1999) のモダルの句構造に基づくモダリティ (Modality) の一部だが, アスペクトより上位にあり, 時制より下位に存在する⁵。

本論の分析では, 再帰表現「自分」は視点表現の投射の中に現れ, その投射の指定部に現れる名詞句によって局所的な束縛を受ける。視点投射指定部に現れるのは「視点保持者」(POV holder) である。この位置には多くの場合 pro が生起する。たとえば「雨が降る」に「証拠性」を表す助動詞「そう」がつく場合を考えると, 「そう」は「証拠性」の投射 (Evidentiality Phrase = EvidP) の主要部となり, その指定部に「視点保持者」, 「証拠性」の場合なら, 天候の状態を見て, 「雨が降りそうだ」と判断する人, Speas (2004: 265) が「目撃者」(witness) と呼ぶ「項」が pro として投射する。

(7) [_{EvidP} pro [雨が降り] そう](だ)。

この pro は文中にコントローラの候補がない場合は談話の当事者である話者, 場合によっては会話の相手である聞き手がコントローラとなり, (7) は話者ないし聞き手の証拠性判断を示す文となる。文中にコントローラとなりうる項がある場合は, その項が「視点保持者」となる。

(8) [_{EvidP} pro_i [雨が降り] そう] なので, タカシ_iは出かけるのをやめた。

この文では「タカシ」が pro のコントローラであり, 「雨が降りそうだ」と判断した視点保持者であるという解釈が可能である。

われわれの分析では, 「自分」は久野 (1978) が「主観的表現」と呼ぶ要素の一種と考え, 視点投射主要部と POV 素性を共有することで「一致」(Agreement) の関係を持つと考える。さらに視点投射指定部に現れる要素 (視点保持者) も視点投射主要部と「一致」(Spec-Head Agreement) の関係を持つ⁶。

⁴ 「証拠性」に対応する要素として \emptyset をあげているが, 助動詞のかたちで発音されないものを意味する。Nishiguchi (2014) で, 「視点投射」が発音されない場合, デフォルトとして「証拠性」が投射されるという考え方を動機づける現象を示している。

⁵ Cinque (1999: 54) の韓国語の例 (3) では証拠性, 評価の助動詞が時制の後, つまり上位に現れている。これらは日本語の「雨が降ったようだ」の「ようだ」のように証拠性を表すモダリティ要素に相当すると思われる。このようなモダリティ要素は, 基本的に話者の視点のみを表すという点で視点投射と異なっている。

⁶ ここで仮定している「一致」は素性の共有と c 統御を構造的条件とするという意味でミニマリスト・プログラムで行われている Agree (Chomsky 2000, etc.) と共通する性質を持つが, ここで仮定する「一致」は POV 素性に基づくもので, \emptyset 素性に基づく Agree とは現段階では異

(9) $[\text{POVP } \alpha_i [\dots \text{自分}_i \dots] \text{POV}_i]$

このように視点投射指定部の要素による「自分」の束縛は、「自分」と視点投射主要部との「一致」、視点投射主要部と指定部の「一致」という2つの「一致」の結果推移的に (transitively) おこる現象である⁷。

たとえば次のような例は、従来言われている、「自分」の先行詞は主語であるという考え方に問題を提起する。

(10) ??タカシ_iが自分_iをほめてくれた。

この文の「自分」の支配的な読みは話者（「私」）ないしは対話の相手（「あなた、君」）を指すもので、主語の「タカシ」を指す読みは、不可能ではないが、「タカシが自分（＝タカシ）をほめた」ことを受益を表す助動詞「くれ」により、話者がありがたがっているといういくぶん不自然な解釈が必要である。また、話者や相手を指す「自分」の用法は方言やスポーツ選手の発言などに限定されていて、一般的な用法としては容認性が高いとは言えない。

受益の助動詞「くれ」を含む文については3節で関連する現象を見るが、この助動詞の特徴は主語以外の談話に関わる人、登場人物が「視点保持者」となって、「ありがたい」という気持ちを持つことである。われわれの「視点投射」を仮定すると(10)は次のような構造に関連づけられる。

(11) $[\text{BenefP } \text{pro}_i [\text{タカシが自分}_i \text{をほめて}] \text{くれ}_i] \text{た。}$

「くれ」は Benef (= Benefactive) という視点投射をなし、その投射の指定部には pro が現れる。この pro をコントロールできる項は文中にないので、文脈の中でもっとも顕著な (salient) 存在として他に候補がいなければ話者ないし対話相手が pro のコントローラに選ばれる。これが(10)の「自分」が「私」ないし「あなた」を指す読みを説明する⁸。

この分析では、

なるメカニズムであると仮定する。

なお、Nishigauchi (2014) 2.1節で示した理論的枠組みでは「一致」の概念に言及していない。このように「一致」を基盤とする分析に切り替えるに至ったのは、『言語研究』の査読者のひとりのコメントがきっかけとなっている。

⁷ Landau (2000) の義務的コントロール (OC) の分析では、主節の機能範疇主要部 F がコントローラ DP と、さらに F が PRO と Agree の関係を持つことで DP による PRO のコントロールが推移的に実現される。

⁸ しかし、『言語研究』の査読者が観察するように、次の (i) が示す、証拠性を表す「そう」では話者によるコントロールは(10)におけるようには支配的でない。

(i) タカシが自分を批判しそうだ。

同査読者が指摘するように、証拠性と受益の投射でなぜこのような差異が出るのかは今後の課題である。

(12) マリはタカシが自分をほめたと思った。

(12) のような文は次のような2つの構造に関連づけられる。

- (13) a. マリが_[POVP] タカシ_iが_[VP(タカシ)自分_i V] POV_i] 思う。
 b. マリ_iが_{[POVP pro_i [VP タカシが_i 自分_i V] POV_i]} 思う。

(13a) は補文の POV 指定部に視点保持者「タカシ」がある「自分」の局所的束縛である。(13b) では、補文の POV 指定部に pro があり、これを主節の主語「マリ」がコントロールする。Pro が補文の「自分」の先行詞となるので、結果的に「自分」の先行詞は主節の主語「マリ」となる⁹。

このように、視点投射の指定部 pro が文中の上位の節の項によるコントロールを受ける時、いわゆる「自分」の「長距離束縛」が実現する。このコントロールが「自分」が長距離束縛と見えるかたちで先行詞を決定されることを可能にする。

ここにかかわるコントロールは「非義務的コントロール」(Hornstein 2003, etc.) である。このタイプのコントロールは節を超えて長距離に働き、c 統御を必要としない。

(14) That it was necessary *pro*_i to travel to Japan was a problem to John_i.

POV 指定部の pro を含むコントロールも長距離に働き、c 統御を要求しない。

(15) [_{pro_i}委員会が自分_iを選出しそう]なことがタカシ_iの目には明らかだった。

このような文は「自分」自体がc 統御しない先行詞を許すのではなく、POV 指定部の pro を含むコントロールがc 統御を必要としないことを示している。

このコントロールを受ける pro はその意味的性質を視点投射の主要部によって決定される。主要部が証拠性や評価を表すものであれば pro はそれぞれ「目撃者」「評価者」という役割をもち、そのコントロールは「有意識条件」に従う。このような pro を Sentient pro (「意識性の pro」) とよぶ。主要部が受益表現やダイクシスの場合は、pro は「基準」(Axis) という物理的な位置の基準としての役割をもち、そのような pro のコントロールは「有意識条件」に従わない。このような pro を Axis pro (「基準の pro」) とよぶ。

⁹ この研究で前提としているのは、局所的束縛を受ける「自分」と従来「長距離束縛」を受けるとされている「自分」は同じもので、すべて視点投射領域の中で局所的束縛を受けるということである。とは言えオランダ語の再帰表現が述部を束縛領域とする (Reinhart and Reuland 1993) のに比べ、本論が主張する日本語の束縛領域は述部 (VP) を含む、アスペクトより高い位置にありテンス・モーダルより低い位置を占める POV という「層」をなすより広い統語領域である。また、局所的束縛を受ける「自分」と「長距離束縛」を受ける「自分」の特性上の差異を主張する研究もあり (Abe 1997) 「自分」を統一的に扱えるかどうかは今後の大きな研究課題である。

「タカシ」は「は」をともなう談話主題である（「談話主題の視点ハイエラキー」）ことから「視点焦点」の資格を持ち、また「視点焦点」は意識を持つ必要がないので(5c)の「タカシ」が「自分」の先行詞になることは何の問題もない。

2.3. 有意識条件と阻止効果

本論の本題に戻って注目したいのは、(5c)のような「有意識条件」を免除されるタイプの文で、副詞節中の主語を1人称「僕」などに代えると、文の容認性が著しく損なわれるということである。

(21) *僕が自分_iをよびにきた時、タカシ_iはぐっすり眠っていた。

「自分」を含む節の主語の人称を変えることが「自分」の「長距離束縛」の妨げになっている現象であり、これは中国語などで広く観察される「阻止効果」が日本語にも存在することを示している。

我々にとって興味深いことに、「阻止効果」は「有意識条件」に従う「自分」を含む文では見られない。(5a)の「時」節の主語を1人称にかえた次の文を考えてみよう。

(22) ?僕が自分_iをほめた時、タカシ_iはひどく驚いた。

いくぶん容認性が下がるが、(21)におけるほどの劣化は見られない¹¹。

これは、「意識焦点」を探すコントロールと「視点焦点」を探すコントロールの間の重要な性質の違いから派生していることと考えられる。「意識焦点」の認定には「人称」は関与しないが、「視点焦点」すなわちエンパシーには「人称」が関与するのである。

(21)の容認性が低いことは、この文が、単一の節には「視点焦点」(empathy focus, EF)が1つだけであることを規定する「視点の一貫性」(久野 1978: 136)を破っていることで説明される。

まず、(21)の「タカシ」は次の理由で「視点焦点」と認定される：(i) 談話主題である（「談話主題の視点ハイエラキー」）、(ii) 「来る」の語彙的特性により「自分」がEFとなる、(iii) 「自分」の先行詞である（「再帰代名詞の視点制約」(久野 1978: 206)）。一方、「時」節の主語に1人称「僕」が使われると、「発話当事者の視点ハイエラキー」(久野 1978: 146)によって、もう1つEFが生まれる。これは「視点の一貫性」の違反である。

第4節で、(21)と(22)の容認性における対比を、多層構造をなす視点投射指定部の pro に付与される指標の一貫性にもとづいて分析する。

¹¹「時」のかわりに「ので」を用いると、容認性が上がるようである。

(i) 僕が自分_iをほめたので、タカシ_iはひどく驚いた。

このように、「有意識条件」と「阻止効果」はいわば相補分布 (complementary distribution) の関係にある。すなわち、「自分」の束縛に関して一方に従う文は他方による制約を受けないということである。われわれはこの事実に対して明確な説明を提示することができる。有意識条件に従う文は「自分」を含む領域が「意識性領域」で、その指定部 pro はコントロール・ストラテジーによって「意識焦点」を探すが、意識焦点の認定に「人称」は関与しないため「阻止効果」は起こらない。有意識条件の制約を受けないタイプの文では「自分」は「基準クラス」の視点投射領域に現れ、その指定部の pro はコントロール・ストラテジーによって「視点焦点」を探すが、視点焦点の認定には「発話当事者の視点ハイエラーキー」(久野 1978: 146) に象徴されるように、1・2 人称代名詞が特別な役割を持っており、「人称」が関与する。このため阻止効果が見られるのである。本論の4節以降で、視点投射主要部を含む「一致」とそれによって生じる指標の一貫性にもとづく分析を展開する。

注2で言及したように、『言語研究』査読者のひとりは (3ab), (4ab) で「自分」を発音せず, pro とした場合でも同じコントラストが見られると観察している。

- (3') a. 先生が_{pro}よびにきた時, タカシ_iはぐっすり眠っていた。
b. *僕が_{pro}よびにきた時, タカシ_iはぐっすり眠っていた。

これは、「くる」を主要部とする DeixP 指定部には「自分」の生起とは独立して pro が投射され、この pro を含むコントロールが「視点焦点」を探すプロセスの中で起こる対比であり、問題の本質が「自分」の束縛よりむしろ視点投射指定部の pro を含むコントロールにあることを示す事実であると考えられる¹²。

この節での考察は、再帰形の「長距離束縛」を示す言語の間での高度に細分化された多様性・変異を説明することにつながる可能性がある。Cole, Hermon and Lee (2001: 4-5) によると、シンガポールで話される北京語 (官話 Mandarin) と潮州語 (Teochew) について、前者は再帰表現 *ziji* の束縛が有意識条件に従わない¹³。しかし、

¹² ただ、これを認めると pro の中に「自分」と同じく POV と「一致」の関係を持つものとそうでないものがあることになる。束縛条件 B については、POVP よりもせまい、主語を含む最小の領域を関与する局所領域とすれば問題ない。

¹³ 一方、Huang and Liu (2001), Huang, Li and Li (2009) で用いられている次の例文について:

- (i) [*Zhangsan lai kan ziji*] *de shibou, Lisi, zheng zai kan shu.*
Zhangsan come see self DE moment Lisi now at read book
'Lisi was reading when Zhangsan came to visit him.'

同じ例文だが、Huang and Liu (2001: 156, 例 (35c)) では?, Huang, Li and Li (2009: 346, 例 (46c)) では?? という容認性の判断を示しており、いずれにしても日本語の (5c) などに比べて低い容認性が示されている。(James Huang 氏 (私信) は、同例文の2つの著作物での判断の相違は特に意図したものではないとしている。) このことは中国語 (Mandarin) の *ziji* の束縛では「有意識条件」は日本語におけるより強くはたらいっており、本稿で仮定する枠組みで言えば、そこに関与するコントロールには「視点焦点」を探すものがないという可能性が考えられる。Nishigauchi (in progress) は、*ziji* は基準クラスの視点投射と「一致」しないと仮定することでこのポイントを捉えようとしている。

いずれの言語（方言）でも阻止効果は見られる。これは中国語では再帰形解釈のメカニズムのなかに「視点焦点」を探すタイプのプロセスが主たる役割を果たしているためということになる。ただし、注 13 参照。他方、Cole, Hermon and Huang (2006: 47-48) によるとノルウェー語などスカンジナビア言語では有意識条件は有効だが阻止効果は見られない。これはわれわれの分析の立場からは、これらの言語では「意識クラス」の視点投射が主たる役割を果たしていることによるのではないかという推測ができる。

3. エンパシーと阻止効果

久野 (1978: 第 2 章) は、「阻止効果」ということばを使っていないが、日本語における阻止効果についての深い、きわめて洞察力のある分析である。

久野 (1978: 213) は、まずロゴフォリック環境、すなわち発言動詞や思考動詞の従属節に現れる「自分」はエンパシーにもとづく制約に従わない、すなわち阻止効果を示さないことを指摘している。

(23) 太郎は僕が自分_iを恨んでいると思いこんでいるらしい。

阻止効果の観点から言えば、主文主語「太郎」と従属節の「自分」の間には人称の異なる「僕」が介在している。エンパシーの観点から言うと、従属節の主語は「発話当事者の視点ハイエラーキー」で最上位にある「私」で、目的語は「再帰代名詞の視点制約」で高いエンパシーを得る「自分」であり、後者は従属節の主語と指示が異なっている。つまり複数の「視点焦点」(empathy foci) を持つことになり、「視点の一貫性」の違反を含んでいるのだが、(23) の容認性は低くない。

しかし、久野 (1978: 212) は (23) の容認性は一般性のある事実ではないとして、次のような例文 (彼の (27ab) を改訂) を提示している。

- (24) a. 太郎は僕が自分_iにお金を貸したことをすっかり忘れたらしい。
b. *太郎_iは僕が自分_iに貸したお金をなくしたらしい。

久野にとっては、ロゴフォリック環境の「自分」(彼は「話者指示詞的用法」という訳語を使っている) は「深いレベル」の「直接談話表示」(Direct Discourse Representation) で第 1 人称の代名詞「私/僕」と表示されると考える。これによると、(24a) を発話した人が「タカシ」だとすると、(24a) の直接談話表示は次のようなものになる。

(25) 太郎:「タカシが僕にお金を貸した。」

この直接談話表示はエンパシーの制約を破るものを含んでいない。このように、

この点は、Cole, Hermon and Lee (2001) で記述される「シンガポールで話される北京語 (官話 Mandarin)」の状況と食い違っているとも考えられ、今後正確な検証が必要である。

久野 (1978) のシステムでは、ログフォリック環境の「自分」は直接談話表示において 1 人称の代名詞から派生されるため、エンパシーの制約を受けないとしている。

次に (24b) を見てみよう。久野はこの文は (24a) と異なり、派生に直接談話表示が関与せず、エンパシーの制約を受けるとしているが、その前提でこの文の分析を行う前に、この文が悪いのは、関係節内の主語が 1 人称だからとは必ずしも言えないことに注意すべきである。

(26) *太郎_iは花子が自分_iに貸したお金をなくしたらしい。

関係節内の主語が「花子」で、1 人称でないにもかかわらず、(26) は容認性が高くない。われわれの分析では、この文の容認性が低いことは関係節内に「証拠性」投射があり、その指定部の pro が「意識焦点」を見つけれられない、言い換えると「有意識条件」を破っていることによって説明される¹⁴。この文の関係節内に受益の「くれ」を用いると、「自分」解釈の容認性が高まる。

(27) 太郎_iは花子が自分_iに貸してくれたお金をなくしたらしい。

受益「くれ」の投射の指定部にある pro が「視点焦点」を探すため、「太郎」が談話主題として「視点焦点」の資格を満たす限り pro のコントローラとなり、「自分」の先行詞となれる。

受益の「くれ」が「基準クラス」の視点投射であることについては、Nishigauchi (2014: 182-183, etc.) に議論がある。例えば次の文が「有意識条件」に従う必要がないことによっても示される¹⁵。

(28) 先生が自分_iをほめてくれた時、タカシ_iはぐっすり眠っていた。

ここで、(27) の関係節内の主語を「花子」から 1 人称の代名詞「僕」にかえてみよう。

(29) *太郎_iは僕が自分_iに貸してくれたお金をなくしたらしい。

¹⁴ 「太郎」を「意識焦点」と読める話者にとってこの文の容認性は低くない。次の文のように、評価の「(て) しまう」をつけて、「太郎」の残念な気持ちを表す文にすると容認性がある。

(i) 太郎_iは花子が自分_iに貸したお金をなくしてしまった。(それで途方に暮れている)
この文では「太郎」が「意識焦点」と読めるからである。すると、(24b) も同様に容認性が上がる。

(ii) 太郎_iは僕が自分_iに貸したお金をなくしてしまった。(それで途方に暮れている。)

評価を表す「(て) しまう」については久野 (1983: 第 3 章) に分析と議論がある。

¹⁵ 澤田 (2014) は受益構文の多様なパターンを考察しているが、「雨が降ってくれた。」のような「くれ」は視点投射の観点からいうと「(て) しまう」と同じく「評価」の投射をなすものと考えられる。つまり、視点投射としては「くれ」には「受益」に属するものと「評価」に属するものの 2 種があることになる。

この文は著しく容認性が低くなっている。久野 (1978) のシステムでは、この文の非容認性は関係節内での「視点の一致」の違反によって説明される。つまり、「補助動詞『クレル・ヤル』の視点制約」(久野 1978: 152) によって「自分」 (= 太郎) が EF となる。さらに「発話当事者の視点ハイエラーキー」によると 1 人称「僕」が EF となり、エンパシーに関する矛盾を含むことになる。

われわれの分析では、(29) の非容認性はどのように捉えられるのだろうか？ 実は、これまで展開してきた分析のメカニズムではこの文の非容認性は説明できないことを認めなければならない。これまでの分析では、(29) の関係節の中に受益「くれ」の領域が投射し、その指定部にある pro は「太郎」が「視点焦点」と認定されることを妨げるものがないので、「太郎」によるコントロールを受ける。

問題は、これまでのわれわれの分析では (29) の関係節内にある 1 人称「僕」の存在を視点投射の構成の中に反映させることができないということである。これを可能にするにはどうしたらいいのだろうか。

4. ダイクシス投射と指標

1 人称・2 人称代名詞がダイクシスに関わる概念であることは明らかである。この点を表示に反映させるにはどうしたらいいだろう。ひとつの考え方として、このような要素を久野 (1978) が「主観表現」とよぶものの一種と考え、「ダイクシス」投射主要部と「一致」によって同一指標を受けると考える。さらに、「基準クラス」の視点投射主要部は原則として同一の指標を共有しなければいけないと考える。このような表示は、1 人称 / 2 人称だけでなく、「右」「左」「上」「下」「前」「後ろ」などのダイクシス要素に適用する。

(30) $[_{DeixP} (pro)_i] [\dots \delta_i \dots] Deix_i$

たとえば受益表現を含む次の文の容認性・非容認性は視点投射の構成と主要部の指標の非一貫性によって表示できる。なお、「自分」が生起するとき以外は視点投射主要部と「一致」の関係を持つ要素が「視点保持者」となり、視点投射指定部の pro は投射する必要がないこととする。

(31) 僕が花子を助けて{やった / *くれた}。

(32) a. $[_{BenefP} 僕_i] [_{DeixP} [(僕_i) \text{が花子を助けて}] Deix_i] \text{やった}_i$
 b. $*[_{BenefP} [_{DeixP} [僕_i \text{が花子}_j \text{を助けて}] Deix_i] \text{くれた}_i]$

(32b) では「受益」投射と「ダイクシス」投射の指標が異なることが、久野 (1978) のシステムでいう「視点の一貫性」の制約の違反を捉えると考えられる。このアイデアを「指標の一貫性」と述べておく¹⁶。

¹⁶「意識クラス」の視点投射においては指標の一貫性は要求されない。これは次の Sells (1987) で議論されているタイプの例に示される事実に関わっている。(例文の表記については注 19

(33) 指標の一貫性

「基準クラス」視点投射の指標は同一でなければならない。

前節で、「有意識条件」を免除されるタイプの文は阻止効果を示す旨の観察をした。問題は (21) のような文のステータスだった。この節で提示している分析では、(21) は次のような表示を持つ。

(34) * $[_{DeixP} \text{pro}_i [_{DeixP} \text{pro}_j [\text{僕}_j \text{が自分}_i \text{をよび}] \text{Deix}_j]$ きた $_i$] 時, タカシ $_i$ はぐっすり眠っていた。

この表示では、「僕」と「一致」の関係を持つダイクシス投射と「くる」のダイクシス投射が異なった指標を受ける。Pro が「自分」と同一指標の場合、「視点焦点」の「タカシ」からコントロールを受け、同一指標を持たなければならない。この場合 pro に与えられる指標が $i=j$ であることはあり得ず、それらと「一致」の関係にあるダイクシス投射が矛盾する指標を受けるという理由で (21) の非容認性を説明することができる。

上で「阻止効果」は「有意識条件」に従う「自分」を含む文では見られないことを観察した。(22) がポイントの例文だったが、この節で考察している分析ではこの文は次のような構造と指標を持つ。

(35) $[_{EvidP} \text{pro}_i [_{DeixP} \text{pro}_j [\text{僕}_j \text{が自分}_i \text{をほめた}] \text{Deix}_j]$ Evid $_i$] 時, タカシ $_i$ はひどく驚いた。

ダイクシス投射の上に不可視の証拠性投射があり、その指定部 pro は「意識焦点」をさがし、「タカシ」によるコントロールを受ける。つまり、「意識クラス」投射の指標と「基準クラス」投射の指標が異なっても問題ないということである。この現象は、次のような一般化が存在することを示している。

(36) 「意識クラス」の視点投射の持つ指標は、「指標の一貫性」に関与しない。

参照。)

- (i) バカのヨシコが自分 $_i$ を追いかけ回していることがミチコ $_j$ を絶望に追いやった。
(Sells 1987: 463, (47))

この例の主観表現「バカの」はこの文に関わる談話役割としては伝達源 (source) に帰される。しかし、伝達源の役割を持つ人物は文中には現れないので、この表現はこの文を発話した人、つまり話者の評価を表すものと解釈される。一方、「自分」の先行詞は「ミチコ」と解釈されるが、後者は Sells (1987) の分析では「自己」(self) と位置づけられる。

西垣内 (2015 予定: 第 8 章) の分析では、「伝達源」に帰される主観表現は「発話行動」の投射 (Speech Act Phrase = SpAP) 指定部の pro と同一指標を持ち、「自分」は証拠性投射の中で束縛を受ける。その結果 (i) は次のような表示を持つ。

- (i') $[_{SpAP} \text{pro}_i [_{EvidP} \text{pro}_j [\text{バカ}_i \text{の } \text{ヨシコ}_i \text{が自分}_j \text{をつけ回している}] \text{Evid}_j]$ SpA $_i$] ことがミチコ $_j$ を絶望へ追いやった。

Sells (1987) の談話役割については次節で少し詳しい議論を行う。

この点に関してもう少し詳しく考察するために、次の例文を考えてみよう。

(37) 僕_jが自分_iをよびにきた時、タカシ_iはひどく驚いた。

この文は(22)同様証拠性投射の pro が「意識焦点」によるコントロールを受けるので、阻止効果による妨げなく容認される。この文の視点投射および指標にかかわる表示は次のようである。

(38) [EvidP pro_i [DeixP pro_i [DeixP pro_j [僕_jが自分_iをよびに] Deix_i] きた_i] Evid_i] 時、タカシ_iはひどく驚いた。

しかし注意が必要なのは、この文が示された指示指標で容認できる時のダイクシス「く(る)」の解釈である。示されている解釈でこの文が容認されるのは「タカシ」の視点から、久野の「直接談話表示」を使えば、「太郎が僕をよびにきた」(この文全体を発話したのは太郎とする)という意識があった時でなければならない。もうひとつの可能性として考えられる、話者＝「僕」の視点から「僕がタカシをよびにきた」という意識を想定して(37)を読むと、この文はまったく容認されないものである。

したがって、この文の容認される解釈では(38)の表示のダイクシス投射「くる」の指標は j ではなく i であることが必要である。これを保証するメカニズムを次の節で考察する。

いま、久野の「直接談話表示」を使えば、と述べたが、久野(1978)の分析では(37)のようなケースでは「直接談話表示」による分析は用いられない。それは、この分析の適用範囲が、発話・思考動詞の補文など、ロゴフォリック環境に現れる「自分」の分析に限定されるからである。実際には久野(1978:217)は、この分析は『『気になる』、『うらむ』、『知る』、『忘れる』等、通常直接話法表現を補文として取り得ない動詞に迄適用する』としているが、(37)のようなケースは久野が列挙している動詞も含んでおらず、「直接談話表示分析」のスコープに入らないと考えるのが妥当である。

上で(23)、(24a)に関してロゴフォリック環境に現れる「自分」はエンパシーにもとづく制約に従わないと述べたが、これも不正確で、久野(1978)の分析ではロゴフォリック環境に現れる「自分」は、発音される言語形式ではなく「直接談話表示」がエンパシー制約の対象となる、という方が正確である。

従って、(37)はロゴフォリック環境を含まない文なので、久野(1978)の分析ではエンパシー制約はこの文の「直接談話表示」ではなく、発音される言語形式に適用される。発音される言語形式としては、この文は「時」節の中で「発話当事者の視点ハイエラーキー」で最上位にある「僕」と、「再帰代名詞の視点制約」および「くる」の語彙的特性によってエンパシー焦点に認定される「自分」という2つのエンパシー焦点を持ち、「視点の一貫性」により排除されるという、事実と反する予測をすることになる。

節の最後に、この節で提案した、1・2人称代名詞を「主観表現」の一種とし、Deix 主要部と「一致」の関係を持つ要素とする分析の持つひとつの帰結について述べたい。

Pan (2001) は中国語の阻止効果について、阻止要素 (blocker) となる1・2人称代名詞がそれ自体潜在的に ziji の先行詞となる主語である必要はなく、たとえば ziji の先行詞となる補文主語の中に含まれて、ziji を c 統御しない位置にあっても阻止効果が見られる旨の観察をしている。(Pan 2001: 285, 例 (12a))

- (39) Baoyü_i yíwei {wode/ nide}_j xuesheng_k bu xihuan ziji_{i'j'k}.
 Baoyü_i think my / your student not like self
 'Baoyü thinks that my/your student does not like himself.'

例文 (39) では、1・2人称代名詞 wo(de) / ni(de) が補文主語である xuesheng 「学生」を主要部とする名詞句に含まれており、1・2人称代名詞自体は ziji を c 統御しておらず、その先行詞となることができない。しかし、1・2人称代名詞は阻止要素としてはたらし、主文主語 Baoyü が ziji の先行詞となることを阻止している。その結果、(39) では1・2人称代名詞を含む補文主語による ziji の局所的束縛のみが可能となっている。

日本語のわれわれが阻止効果と考える現象においても、同様のことが観察される。例えば上の例文 (21) の「時」を主要部とする副詞節の主語を1人称代名詞を含む「僕の妹」としても、やはり主節主語「タカシ」は「自分」の先行詞として解釈することができない。

- (40) *僕の妹が自分_iをよびにきた時、タカシ_iはぐっすり眠っていた。

この節で提案した分析では、1人称「僕」は Deix 投射の主要部と「一致」の関係を持ち、その構造的条件は Deix が「僕」を c 統御するというものである。注6参照。さらに、Deix 主要部はその指定部の pro と「一致」(Spec-Head Agreement) の関係を持つ。

- (41) [_{DeixP} pro [[僕の妹]... 自分...] く(る)]
-

「自分」がこの投射の中で Deix と「一致」すれば推移的に pro すなわち「僕」に束縛されることになる。仮にもうひとつ上位に Deix 投射を仮定し、その主要部と「自分」が「一致」の関係を持てば、2つの Deix は「指標の一貫性」の違反を引き起こすことになり、いずれにしても「タカシ」を「自分」の先行詞とすることができない。

5. 「一致」の拡大¹⁷

例文 (37) が示唆しているのは、証拠性投射の pro をコントロールする項は多層構造をなす視点投射の下位にあるダイクシスなどの投射の指定部 pro をもコントロールするということである。

これは Sells (1987) の「ロゴフォリック階層」(the Logophoric Hierarchy) の概念的な基盤を作っている考察に通じる現象である。この階層は次のようなものである。

(42) 伝達源 (source) : 伝達の意図的行為者

自己 (self) : 命題内容がその心理状態・態度を記述する人

基準 (pivot) : その(時空に関わる)位置に関して命題内容が評価される人

この階層は、「伝達源」である人はその心理状態が表現されている人(「自己」)でもあり、またその人の視点から命題内容が記述されている人(「基準」)でもあるが、その逆は成り立たないことなどが根拠となっている。(37)の場合にあてはめて考えると、「タカシ」は証拠性に関しては「自己」であり、ダイクシス「く(る)」に関しては「基準」である¹⁸。

この点を少し詳しく見るために、Sells (1987) が「自己」と関連づけられると考える「主観表現」として「不可解にも」を含む文を考えてみよう¹⁹。

- (43) a. タカシは[ヨシコが不可解にもあとをつけ回していると言った。(Sells 1987: 464, 例(49))
 b. [ヨシコが不可解にもあとをつけ回していること]がタカシをいらだたせている。(Sells 1987: 464, 例(50))
 c. ヨシコが不可解にも自分呼びにきた時、タカシはぐっすり眠っていた。

「タカシ」が「伝達源」である(43a)、「タカシ」が「自己」である(43b)のいずれでも「不可解」は「タカシ」の視点からの評価と読むことができる。しかし Sells の分析で「基準」(Pivot)と位置づけられる(43c)の「タカシ」はこの文の「不可解」の評価者とは読まず、この文の「不可解」は話者(「外的伝達源」)の評価としか考えられない。

Sells (1987) は、「基準」(Pivot)と対応する「主観表現」として「愛しい」を考えている。「愛しい」は久野(1978: 188-202)においても「視点焦点」の視点を表す表現として論じられている。久野は同様の表現として「なつかしい」などをあげている。「愛しい」を含む次の例文を考えてみよう。

¹⁷ この節での分析は西垣内(2015 予定: 第8章)で詳細な議論を展開している。

¹⁸ 実は Sells (1987) の談話役割(42)は関係概念ではないので、「～に関しては」という言い方があてはまらないことは注意すべきであり、また本分析との重要な相違点でもある。

¹⁹ Sells (1987) で用いられている例文はローマ字表記であるが、本論文ではかな漢字混じりの日本語表記で引用している。同論文からの日本語例文は以下同様。

- (44) a. タカシ_iは太郎に[愛しいヨシコが自分_iを憎んでいること]を話した。(Sells 1987: 465, 例(56))
 b. [愛しいヨシコが自分_iを憎んでいること]がタカシ_iを絶望へ追いやった。(Sells 1987: 466, 例(58))
 c. 愛しいヨシコが自分を呼びにきた時, タカシはぐっすり眠っていた。

これらすべての文で「愛しい」は「タカシ」の視点からの表現と読むことができる。

このように, Sells (1987) の観察では, 「伝達源」と対応する「主観表現」は「伝達源」の視点からの評価としか読めないが, 「自己」と対応する「主観表現」は「自己」と「伝達源」の視点を表し, 「基準」(Pivot) と対応する「主観表現」は「基準」「自己」「伝達源」を表すという階層関係が存在する。これが (42) の「ロゴフォリック階層」の経験的な動機づけとなる要因のひとつである。

この基盤となっているのは, Sells (1987: 456) による, これらの談話役割についての, 「コミュニケーションをする人(「伝達源」)は意識を持っており(「自己」), 他者の心の中を表そうとするとその人の物理的側面(「基準」)をかりなければならない」と要約できる3つの役割のあいだの含意関係である。

われわれの分析では, Sells (1987) の談話役割は, 特定の視点投射指定部 pro のコントローラと次のように対応する。

(45) **Sells(1987)の談話役割** **__指定部proのコントローラ**

伝達源 (source)	発話行為 (Speech Act Phrase)
自己 (self)	評価 (Evaluative), 証拠性 (Evidential)
基準 (pivot)	受益 (Benefactive), ダイクシス (Deixis)

つまり, Sells (1987) の「ロゴフォリック階層」はわれわれの分析の基盤である視点投射の構造的階層関係と対応しており, 「ロゴフォリック階層」の上位にある談話役割はわれわれの視点投射で上位に位置する範疇の指定部コントローラに対応する。

われわれの分析で, (44b) がどのような構造を持つか考えてみよう。

- (46) [_{EvidP} pro_i [_{DeixP} (pro_j) [愛しい_jヨシコが自分_iを憎んでいる] Deix_j] Evid_i] ことがタカシ_iを絶望へ追いやった。= (44b)

「自分」は証拠性投射主要部と「一致」し, 後者の指定部 pro は「経験者」の意味役割を持つ「タカシ」を「意識焦点」としてコントロールを受ける。これによって「自分」の先行詞は「タカシ」となる。一方, 「愛しい」は(方向性を表すという意味で)ダイクシス投射主要部と「一致」する。Sells (1987) の観察では, この文の「愛しい」は「タカシ」の視点を表すのだが, それを (46) の表示の中で可能にするには, ダイクシス投射が証拠性投射の指標を受け継ぎ, 指標 i を持つことである。

われわれの分析では、このように、Sells (1987) が観察する談話役割の間の階層関係および含意関係は、多重構造をなす視点投射の階層関係に関連づけて分析する。基本的な考え方は、視点投射の上位の投射の持つ指標は下位の投射に受け継がれるということである。

$$(47) \quad \dots [_{\text{SpAP}} \text{pro}_i [_{\text{EvalP}} \text{pro}_i [_{\text{EvidP}} \text{pro}_i \dots \text{Evid}] \text{Eval}] \text{SpA}]$$

ここで起こっていることは、上位の視点投射と下位の視点投射の間の「主要部間の一致」(head-to-head agreement) である。さらにそれぞれの視点投射の中で主要部と指定部の一致が起これば、下位の視点投射指定部の pro は上位の視点投射と「拡大された一致」(extended agreement) と呼べる関係を持つことになる。このように、「発言者」である人は「評価者」であり、「目撃者」でもあり ... という含意関係を視点投射の階層構造関係によって捉えるという考え方である。

(37) の分析に戻ろう。この文の「く(る)」を主要部とするダイクシス投射 (Deix2) は、証拠性投射主要部と主要部間の一致 (47) によって同一指標を持つことになる。

$$(48) \quad [_{\text{EvidP}} \text{pro}_i [_{\text{Deix2P}} \text{pro}_i [_{\text{Deix1P}} \text{pro}_j [\text{僕}_i \text{が自分}_i \text{をよびに}] \text{Deix1}_j] \text{きた}_i] \text{Evid}_i] \text{時},$$

タカシ_iはひどく驚いた。

このことによって、「く(る)」(Deix2) に付与された指標は「僕」と「一致」の関係にあるダイクシス投射 Deix1 と異なった指標を持ち、一見すると「指標の一貫性」の違反に見える。しかし、われわれの分析メカニズムでは、指標 i は上位の視点投射の指標が主要部間の一致による「指標の受け継ぎ」が起こることによって得られたもので、本来的に「基準クラス」の視点投射に与えられたものではない。このことから、指標 i は (36) が言うように「指標の一貫性」に関与しない。次の節で、この線に沿った分析が経験的に妥当であると考えられる根拠となる議論を提示する。

6. ロゴフォリシティーとエンパシー

われわれのもともとの問題である (29) の分析に戻ろう。この文の 1 人称の代名詞を「主観表現」として扱い、「ダイクシス」領域を投射させると、「基準クラス」の視点投射の指標の非一貫性を示すことができる。

$$(49) \quad * \text{太郎}_i \text{は} [_{\text{BenefP}} \text{pro}_i [_{\text{DeixP}} \text{pro}_j [\text{僕}_j \text{が自分}_i \text{に貸し}] \text{Deix}_j] \text{てくれ}_i] \text{たお金をなくしたらしい。}$$

この表示では「ダイクシス」投射は「僕」と「一致」し指標 j を持ち、「受益」投射は非主語の「自分」と「一致」して指標 i を持ち、さらにこれの指定部 pro は「視点焦点」としての主文主語のコントロールを受けるので、「基準クラス」の視点投射に適用する「指標の一貫性」によって排除される。文中には「意識焦点」となれ

るコントローラがないので、「証拠性」が投射しても関与する投射の指標には影響しない²⁰。

久野にとって、(29)はロゴフォリック環境を含まない文なので、「直接談話表示」を通した派生を受けず、発音される形式のままエンパシーの制約に従うものとして扱われた。久野が「直接談話表示」を通した派生を受けると考える(24a)についてさらに考えてみよう。この文の従属節の中に受益の助動詞「くれ(る)」を加えると、文の容認性は著しく低下する。

(50) ?*太郎_iは僕が自分_iにお金を貸してくれたことをすっかり忘れてたらしい。

久野(1978:217)は「忘れる」の従属節はロゴフォリック環境を作ると考えているのだから、この文は次のような「直接談話表示」を通して派生すると考えられる。ここではこの文全体を発話したのが「タカシ」だとしよう。

(51) 太郎:「タカシが僕にお金を貸してくれた。」

この「直接談話表示」は容認性にまったく問題がないので、(50)の派生に関与する表示ではないと考えるべきである。ここでの「忘れる」の従属節をロゴフォリック環境と見なすことに問題があると思われる。

このことを見るために、(50)を次の久野(1978:217)による例文(彼の(36b))と比較してみよう。

(52) ?太郎_iは僕が自分_iを助けてくれたことを感謝しているということだ。

文法性の判断「?」は久野によるものだが、(52)は(50)よりかなり容認性が高い。この違いは(50)の述語が「忘れた」であるのに対し(52)のそれが「感謝している」である点にある。(50)の「忘れた」は主文の主語が(文の発話時点で)従属節の内容を意識していないと解釈される。従って主文の主語は「意識焦点」ではなく「視点焦点」である。とすれば、ここで関与するのは「基準クラス」の視点領域の pro を含むコントロールである。

(50') ?*太郎_iは [_{BenefP} pro_i [_{DeixP} pro_j [僕_jが自分_iにお金を貸して] Deix_j] くれ_i] たことをすっかり忘れてたらしい。

この構造では受益投射の指定部 pro は「視点焦点」と認定できる「太郎」のコントロールを受け、指標 i を受けるが、「主観表現」「僕」を束縛するダイクシス投射指定部の pro は「太郎」のコントロールを受けられない(さもないと「太郎」=「僕」となる)。従って、「基準クラス」の視点投射が矛盾した指標を持つことが(50)の

²⁰「証拠性」が投射しても、その指定部 pro のコントローラは文中に得られないので、「話者」がコントローラとなる。その場合証拠性投射の指標は j となり、視点投射の主要部間一致が起こると「受益」投射の指標が j となる。後者指定部 pro のコントローラが「太郎」であれば、「太郎」の指標も j となり、「僕」=「太郎」が強いられることになる。

非容認性を説明する。

他方, (52) では, 「太郎」が従属節の内容を意識していると読めるので, 「意識焦点」と認定できる。

(52') ?太郎_iは [EvidP pro_i [BenefP pro_i [DeixP pro_i [僕_jが自分_iを助けて] Deix_j] くれ_i] Evid_i] たことを感謝しているということだ。



証拠性投射指定部の pro は「意識焦点」である「太郎」のコントロールを受け, 指標 *i* を持つ。受益投射は証拠性投射との主要部間「一致」によって同じく指標 *i* を持つ。ダイクシス投射はこれらと異なった指標を持つが, 受益投射の指標は証拠性投射の指標を受け継いでいるためダイクシスと受益投射の指標に不一致があっても「基準クラス」投射での指標の不一致とならない。

主文主語が「意識焦点」と認定されることが重要であることは, (50) のように動詞「忘れ」が使われていても, 主文主語が文の発話の時点で従属節の内容を意識していると解釈できる文では阻止効果が起こらないことによって支持される。

(53) 太郎_iは僕_jが自分_iにお金を貸してくれたことを忘れたがっているようだ。

この文では, 主文主語が「意識焦点」と認定される(発話時点で忘れてはいない)ので, 証拠性投射の pro を含むコントロールが働き, 概略 (52) 同様の構造と指標構成となる。

この考察は, 「自分」の長距離束縛と見える現象に本当に関与しているのが, Sells (1987) の分析で主張されている「伝達源」のような概念ではなく, 「自分」の潜在的な先行詞の指示対象が従属節の内容を意識しているかどうかということが決定的な要因であるとする本分析を支持する上で重要な意味を持っている。

7. 阻止効果の非対称性とエンパシー

ここまで, 日本語における「阻止効果」と呼べる現象をエンパシーに関わる現象として扱い, Kuno and Kaburaki (1977), 久野 (1978) などの枠組みでは「視点の一貫性」にもとづいて分析されている現象を視点投射の中でも「基準クラス」の投射の「指標の一貫性」による分析を展開してきた。

「阻止効果」についてはさまざまな見方があり, 基本的には1人称/2人称の代名詞が加わることによって再帰形の長距離束縛が阻止される現象を指す。しかし, これまでにも観察してきたように, 日本語ではエンパシーの制約違反が起こらない限り阻止効果の現象は見られない。

特に, 本分析では「意識焦点」がコントローラとなるコントロールを含むケースは「阻止効果」が発生しないことを見たのだが, 「視点焦点」がコントロールに関わるケースでも, エンパシーの違反がない限り「阻止効果」は起こらない。次の例文をそれぞれ (29), (50) と比較してみよう。

- (54) 僕_iは太郎_iが自分_iに貸してくれたお金をなくしたようだ。
 (55) 僕_iは太郎_iが自分_iにお金を貸してくれたことをすっかり忘れていた。

これらはいずれも関係節、従属節それぞれの中の受益投射指定部 pro を「視点焦点」としての「僕」がコントロールすることを阻むものが何もないことによる。

これらの例文では主文主語が「僕」なので、関係節、従属節の内容について主文主語は意識していると考えるのが普通である。従って実際に起こっているのは「意識焦点」としての「僕」による証拠性投射の pro に対するコントロールだが、「基準クラス」の視点投射に関わる指標に矛盾が生じないことにはかわりない。

このつながりで、中国語の阻止効果に関する研究の重要な著作のひとつ、Pan (2001) の主張を見てみよう。Pan (2001: 283) は中国語の阻止効果には非対称性があると主張し、「1 人称 / 2 人称の主語が介在すると ziji の長距離束縛を阻止するが、3 人称の主語は 1 人称 / 2 人称名詞句による ziji の長距離束縛を必ずしも阻止しない」(Pan 2001: 283) と述べ、次のような対比を示す例文を提示している²¹。

- (56) a. *W_i bu xibuan Lisi_j guan ziji_{vj} de shi.*
 I not like Lisi interfere self DE matter
 'I don't like Lisi interfering in my (own) business.' (Pan 2001: 283, 例(7a))
 b. *Lisi_i bu xibuan {wo / ni}_j guan ziji_{vj} de shi.*
 Lisi not like I/you interfere self DE matter
 'Lisi doesn't like me/you interfering in my/your (own) business.' (Pan 2001: 283, 例(7c))

われわれの分析の立場からはこれは非常に興味深い観察で、第 2 節で見た Cole, Hermon and Huang (2006) の、阻止効果は Sells (1987) の意味での「基準」(Pivot) すなわちわれわれの分析では「視点焦点」に近いものに関わる現象であるという観察とともに、中国語の阻止効果に関しても本分析の方向での考察が必要であることを示唆しているのではないかと思われる。

日本語でも、阻止効果が非対称性を示すことは (54), (55) のほか、次の例文によっても例示される。

- (57) 先生が自分_iをよびにきた時、僕_iはぐっすり眠っていた。

この文での「僕」は主文の中で (i) 談話主題であり、(ii) 「発話当事者の視点ハイエラーキー」の上位であり、「時」節のなかでも (i) 「くる」の非主語であり、(ii) 「自分」の先行詞であり、すべての要因について一貫して EF と認定される。

しかし、日本語の場合、単に 1 人称 / 2 人称が介在する・しないというだけが問題の本質でないことは、次の (58), (59) の受益表現の方向性をかえた例文が容認

²¹ グロス、訳文は原文に従っている。

性が低いことによって示される。

(58) *僕_iは太郎が自分_iに貸してやったお金をなくしたらしい。

(59) *僕_iは太郎が自分_iにお金を貸してやったことをすっかり忘れていた。

受益表現「やる」の視点保持者は主語「太郎」であり、これらの文はいずれも次のような受益投射を含む構造を持っている。

(60) 僕..._[BenefP] 太郎 [... 自分... V] やる]

受益投射の指定部を指示表現「太郎」が占めるため、「自分」が「太郎」以外の先行詞をとるためには受益投射の外側にそれを求めなくてはならないが、本分析ではそれは許されない。つまり、(58), (59)の非容認性は「自分」が局所的束縛を受けないことによって説明される。

もう1つの可能な分析として、(58), (59)の「自分」がいずれも第1人称「僕」に束縛されるものであることに着目して、これらの「自分」は主文の「僕」によるコントロールを受けるダイクシス投射の指定部の pro によって束縛されるということが考えられる。

(61) 僕_i..._[BenefP] 太郎_j [_[DeixP] pro_i [... 自分_i... V] Deix_j] やる]

この分析によれば、(58), (59)の非容認性は受益投射とダイクシス投射の、基準タイプの視点投射における指標の一貫性が欠如していることによって説明される。

この後者の分析は、(58), (59)の「自分」を「僕」に置き換えた時に同様に容認性が低いことによっても支持されると考えられる。

(62) *僕_iは太郎が僕_iに貸してやったお金をなくしたらしい。

(63) *僕_iは太郎が僕_iにお金を貸してやったことをすっかり忘れていた。

4節の分析以来、第1人称の「僕」はダイクシス投射と「一致」の関係を持つと考えてきている。従って(62), (63)はいずれも(61)と関与する点では変わらない指標パターンを持つのである。

上で見た(50)と(52)の対比では、後者のコントローラが「意識焦点」でありうるので、証拠性投射主要部からの主要部間「一致」によって受益投射が証拠性投射から指標を受けることで、「指標の一貫性」が守られ、(52)の容認性が高まるという現象を観察した。

われわれにとって興味深いことに、(50), (52)のような文で「意識焦点」によるコントロールが可能になるような主文の述語を選んでも、(58), (59)のタイプの文の容認性は変わらない。

(64) *僕_iは太郎が自分_iを助けてやったことを感謝している。

この文では主文主語が「意識焦点」と解釈でき、従属節で証拠性投射が投射すれば

その指定部 pro は主文主語「僕」によるコントロールを受けることには何ら問題ない。問題は、証拠性投射が投射しても主要部間「一致」によって受益投射「やる」の指標が変わることはない。その指定部にあるのは指示表現だからである。

(65) 僕_i...[EvidP pro_i [BenefP 太郎_j [DeixP pro_i [... 自分... V] Deix_j] やる_j] Evid_i]



結果得られる表示では受益投射の指定部に「太郎」があり、ダイクシス投射指定部には「僕」によってコントロールされる pro があるので、「太郎」=「僕」が許されない限り、基準クラスの視点投射の中で指標の一致が破られることになり、これが (64) の非容認性を説明する。

8. 結論

この論文では、中国語などで観察され、重要な問題領域を作っている阻止効果について考察した。日本語で阻止効果が顕著に見られるのは「自分」の先行詞が「視点焦点」である時で、「意識焦点」が関わるケースで起こる「有意識条件」の効果と相補分布をなす。

本論文の分析では、日本語の阻止効果はエンパシーの制約の違反であり、これに関わるさまざまな言語現象について Kuno and Kaburaki (1977)、久野 (1978) など「視点の一貫性」という概念のもとで分析された現象を、「自分」と「一致」する「基準クラス」の視点投射の「指標の一貫性」によって説明する分析を提示した。本論文の中心として論じてきたエンパシーや「有意識条件」に関わる「自分」束縛の制約は、c 統御などの構造的関係や局所領域の定義などのみに基づく形式的な統語論のアプローチの限界を示すものとして考えられてきたものである。本論文は、これらの制約について構造的な観点から限定を加える必要性を提案したもので、理論言語学の可能な方向性のひとつを示したと言えるのではないかと思う。

冒頭で述べたように、阻止効果の現象は中国語 (Mandarin) で顕著に見られるものであり、本論で示した分析的枠組みが、中国語の阻止効果を分析する上で有効であるかを検証しなければ、本論文を含む研究プログラムが不十分なものと認めなければならない。Nishigauchi (in progress) はその方向での考察を進めており、ziji と「自分」との差異を次の2点によって捉えようとしている。

1. 「自分」は「意識クラス」「基準クラス」の視点投射と「一致」するが、ziji は「意識クラス」の視点投射のみと「一致」する。
2. 局所的束縛と思われるケースにおいても、「自分」の束縛には視点投射の POV 素性による「一致」が関与するが、ziji の局所的束縛は \emptyset 素性の「一致」によってもたらされる。

1 番目のポイントは、中国語では「有意識条件」の効果が「基準クラス」の視点投射（「行く」「来る」など）の介在によって解除されることがないという点（注 13 参照）

に関連し、2番目のポイントは *ziji* が局所的束縛を受けることを好む傾向があり、「自分」が Lidz (2001) の意味での「近似再帰形」(near-reflexive) であるのに対し、*ziji* は「純粋再帰形」(pure-reflexive) であることを捉えるものである。また、両言語での阻止効果は、ともに1人称・2人称要素がダイクシス投射と「一致」することに起因するが、そこから異なった現象が発生することで現出する事象であることを示している。

「自分」と *ziji* の「極小的差異」(micro-variation) を明らかにすることが本論文を含む研究プログラムの目標であり、その見通しは現実的なものになりつつあると言える。

参 照 文 献

- Abe, Jun (1997) The locality of *zibun* and logophoricity. *Researching and Verifying an Advanced Theory of Human Language* 1: 595–626.
- Chomsky, Noam (2000) Minimalist inquiries: The framework. In: Roger Martin, David Michaels and Juan Uriagereka (eds.) *Step by step: Essays on minimalist syntax in honor of Howard Lasnik*, 89–155. Cambridge, MA: MIT Press.
- Cinque, Guglielmo (1999) *Adverbs and functional heads: A cross-linguistic perspective*. Oxford, UK: Oxford University Press.
- Cole, Peter, Gabriella Hermon and C.-T. James Huang (eds.) (2001) *Long distance reflexives: Syntax and semantics* 33. San Diego, CA: Academic Press.
- Cole, Peter, Gabriella Hermon and C.-T. James Huang (2006) Long-distance binding in Asian languages. In: Martin Everaert and Henk van Riemsdijk (eds.) *The Blackwell companion to syntax, Vol. 3*, 21–84. Cambridge, MA: Blackwell.
- Cole, Peter, Gabriella Hermon and Cher Leng Lee (2001) Grammatical and discourse conditions on long distance reflexives in two Chinese dialects. In: Cole, Hermon and Huang (2001), 1–46.
- Hornstein, Norbert (2003) On control. In: Randall Hendrick (ed.) *Minimalist syntax*, 6–81. Cambridge, MA: Blackwell.
- Huang, C.-T. James, Yen-hui Audrey Li and Yafei Li (2009) *The syntax of Chinese*. Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- Huang, C.-T. James and Luther Liu (2001) Logophoricity, attitudes and *ziji* at the interface. In: Cole, Hermon and Huang (2001), 141–195.
- 久野暉 (1973) 『日本文法研究』東京：大修館。
- 久野暉 (1978) 『談話の文法』東京：大修館。
- 久野暉 (1983) 『新日本文法研究』東京：大修館。
- Kuno, Susumu and Etsuko Kaburaki (1977) Empathy and syntax. *Linguistic Inquiry* 8: 627–672.
- Landau, Ian (2000) *Elements of control: Structure and meaning in infinitival constructions*. Dordrecht: Kluwer Academic Publishers.
- Lidz, Jeffrey (2001) Condition R. *Linguistic Inquiry* 32: 123–140.
- Nishigauchi, Taisuke (2014) Reflexive binding: Awareness and empathy from a syntactic point of view. *Journal of East Asian Linguistics* 23: 157–206.
- Nishigauchi, Taisuke (in progress) The blocking effect in Chinese and Japanese. Paper read at a syntax meeting, the Department of Linguistics, University of Delaware, August 2014.
- 西垣内泰介 (2015 予定) 『統語的現象としての「視点」—「自分」の解釈と「視点投射」—』東京：くろしお出版。
- Pan, Haihua (2001) Why the blocking effect? In: Cole, Hermon and Huang (2001), 279–316.
- Reinhart, Tanya and Eric Reuland (1993) Reflexivity. *Linguistic Inquiry* 24: 657–720.
- 澤田淳 (2014) 「日本語の授与動詞構文の構文パターン類型化—他言語との比較対照と合わせて—」『言語研究』145: 27–60.
- Sells, Peter (1987) Aspects of logophoricity. *Linguistic Inquiry* 18: 445–479.

Speas, Margaret (2004) Evidentiality, logophoricity and the syntactic representation of pragmatic features. *Lingua* 114: 255–276.

執筆者連絡先：

〒 657-0015 神戸市灘区

篠原伯母野山町 1-2-1

神戸松蔭女子学院大学 大学院 言語科学専攻

e-mail: gauchi@shoin.ac.jp

[受領日 2013 年 12 月 19 日

最終原稿受理日 2014 年 7 月 11 日]

Abstract

Empathy and the Blocking Effect: The Binding of *zibun* and the Point-of-View Projections

TAISUKE NISHIGAUCHI

Kobe Shoin Women's University

The present paper discusses and analyzes the blocking effect, hitherto discussed almost exclusively in connection with reflexive binding in Chinese. We argue here that the blocking effect is observed in Japanese when the putative antecedent of *zibun* is an Empathy Focus, and that this effect is in complementary distribution with the awareness condition, which involves what we call the Sentient Focus.

We argue that the blocking effect in Japanese is a manifestation of empathy-related violations, and that empirical phenomena hitherto dealt with in terms of empathy-violations should be accounted for by restrictions on the indexing mechanism involving Point-of-View (POV) projections and POV-sensitive items (such as *zibun*) which are related by Agreement.